

母語・継承語・バイリンガル教育研究大会 2009. 8. 9

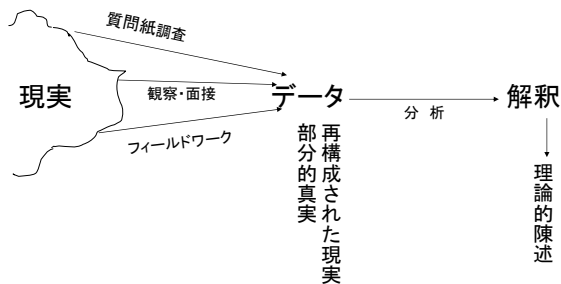
本質主義と構築主義 ～バイリンガルのアイデンティティ研究のために～

箕浦康子
お茶の水女子大学名誉教授

文化的アイデンティティ研究の難しさ

- 1) 研究方法論のユレ
本質主義 vs. 構築主義
- 2) 文化概念のユレ
「文化」をどのようなものとするか？
1980年代中葉に大きな転換点
文化人類学から他分野へ広がっていく
「文化的アイデンティティ」の概念化に必然的に影響

人が生活している場(現実)から データを採集するさまざまな手法



諸科学の前提としての存在論・認識論

- 存在論と認識論は、諸科学の知識的・信念的体系の原理的・枠組的な次元(ヒュポダイム)
- 廣松 渉 1988 新哲学入門(岩波新書)
 - (1) 認識するとはどういうことか(客観主義vs主観主義)
 - (2) 存在するとはどういうことか(実在論vs反実在論)
 - (3) 実践するとはどういうことか

存在論

「客観的実相自体」は存在する(実在論)のか、
「純然たる客観的実相自体」は存在しないのか。

存在論・認識論上のpositioningとメタ・アプローチ

		認識論(Epistemology)	
		Objectivism	Subjectivism
存在論	実在論	論理実証主義 (本質主義)	社会構築主義 (解釈的 vs. 批判的)
	反実在論	X	ポストモダンの一部?

認識論

存在界の法則と称されるものは、「客観的与件と主観的活動の協働の所産」(構築主義)

現実世界の把握様式(メタアプローチ) ～認識論上のpositioning～

- 論理実証主義(Logical Positivism)
従来の心理学・社会学・文化人類学研究の立場
本質主義(Essentialism)とも呼ばれる
- 構築主義(Social Constructionism)
 - (1) 解釈的アプローチ
私がフィールドワークをするときの立場
データとは再構成された部分的現実である
 - (2) 批判的アプローチ
フェミニズムや批判的教育学の立場
再構成されたものなら、造りかえられる

現実の把握様式

- (実証的) ただ一つの客観的現実を前提として、その現実についての法則定立をめざす。
現実とは、誰が見ようと同じに見える「本質的なもの」として実在している。
- (解釈的) 現実とはさまざまな相貌をみせるマルチなもの
Reality Remade
人々が生きている現実とは、構築されたものである。思い込みの世界で生きている。
- (批判的) 構築されたものならば、作りかえることができる(現実の脱構築)。

研究とは？(Theoretical Imperatives)

- 論理実証主義的アプローチ：
物事には本質があり、その本質を解明することが科学の仕事、因果関係の探求(causal explanation)
混沌とした世界に法則を見出し、秩序をもたらす
- 解釈的アプローチ：
理解 (interpretive understanding)
- 批判的アプローチ：
批判意識の覚醒・エンパワメント
権力によって作為的に創出された観念の脱構築

研究の目的

- (実証的) 人間行動を律している普遍的な法則の定立 知見の一般化
- (解釈的) 特定状況における人間行動の規則性についての理解の共有 知見の比較
- (批判的) 結果を分析して不平等をあげ、解放のスタンスを育む

研究のフォーカス

- (実証的) 観察可能な行動に着目。
客観的に「測る」ことに力点
- (解釈的) 行動や状況に埋め込まれた意味に着目。「分かる」
- (批判的) 不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」

研究のプロセス

- (実証的) ノイズの除去 因果関係把握 条件統制、変数操作
- (解釈的) 社会的相互作用やそこで伝達されている意味を分析する。 意味の理解
- (批判的) 隠された権力による統制を解明し、構造や行動に変化を持ちこむ

研究者のスタンス・対象者との関係

- (実証的) 研究対象との間に距離をとる；
客観的であることを標榜
被験者・被調査者と呼ばれ、研究者の教示にしたがう受動的な情報提供者
- (解釈的) 研究対象の活動に参加する；
主観的であることをいとわない
能動的な協力者になってもらう
- (批判的) 研究者は、批判的意識の覚醒を促す教師であり、対象者から学ぼうとする学習者でもある。 協力的な学習者

文化概念のユレとアイデンティティ研究

- 伝統的な土地と結びついた固定した実体として文化を考える。
境界に囲まれた一枚岩的で自明な統一体
「日本文化」、「アメリカ文化」とい用語の背後にある考え方
- Globalizationで、この暗黙の前提が崩壊
文化は、本来、Hybridで流動的なもの
文化を国家から切り離し、文化過程として考える
この考えに基づくアイデンティティ概念は、「状況に応じて変わる何者か」、モザイク状のアイデンティティ

アイデンティティ研究の諸相

		方法論上の立場	
		本質主義	構築主義
文化概念	不変の文化	従来の研究(1)	(2)
	文化はHybrid 文化はFluid	X	新しいタイプの研究(3)

外部世界の構造の認識と人間内部の心理的ダイナミズム

「不変の文化」へのアプローチの違い

- (1)は、従来のアプローチ
アイデンティティという個人に固有のものがあるという前提で、アイデンティティ尺度(Marcia)を使う。社会の文化は実在する。
アイデンティティ概念は、「私が単一の何者かであること」
- (2)の構築主義的アプローチ
なぜ、文化や国家は不変と感じられるのか？
「日本文化」があるという考えがなぜ多くの人に共有されるに至るのか？

Anderson, B.1983 『想像の共同体~ナショナリズムの起源と流行~』(日本語訳、1987)

時間をどう扱うか？

アイデンティティ研究は、必然的に時間の流れを含む

- 個人の発達の軸による変化
- 時代の流れ

二つの時間の流れの交錯するなかでアイデンティティは紡がれていく。

それを把握できる研究方法はどれか？

個人と環境の相互作用をどう概念化するか

- 従来の研究
Assimilation-Reproduction model
個人は、環境からの文化化の受け手
- 構築主義的研究
Subjects as Active agents
主体のpositioningやsubjectivityを重視
文化は主観的現象である
アイデンティティは、個人の属性ではなく、周囲との関係で決まる動的なもの

文化はfluidで、本来hybridなものという考えによる
アイデンティティ研究の新潮流

1) 表象重視: Cultural Studiesの系譜

ある特定の表象がどのように社会的力を得ていくか？
個人は、それにどう対応していくか？

identityは、**positioning** の仕方である。

渋谷真樹 2001 「帰国子女」の位置取りの政治

2) 経験重視: HabitusとPractice

個々人は、文化接触場面でどのような経験をしているか？

subjectivity: 公的表象と自己意識の主体との相互作用の結果がidentity
他者からどうまなざされるか？

アイデンティティ研究の新潮流 cont'd

- 3) 批判的アプローチに立つ文化アイデンティティ研究
Cultural Studiesとの近縁性
山内裕子氏による日系ブラジル人研究
戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』
個人に多様なpositioningを許す社会
サンフランシスコ と 大阪

質的研究の重視

- Subjectivityを探るtoolとしてのnarrative
Linger No One Home: Brazilian Selves
Remade in Japan
「個々人がどのような生活世界を生きているか」を聞き取る
- 語られざるpositioningやsubjectivityを探る研究手法としてのフィールドワーク

「研究」は時代の産物: 自らの足取りを振り返って

- 論理実証主義全盛、伝統的文化概念
1970年代後半、UCLA、文化人類学科
- 1979 Life In-Between: The acquisition of cultural identity among Japanese children living in the United States.
- 1984 子供の異文化体験: 人格形成過程の心理人類学的研究
- 2003 上記の増補改訂版 (構築主義へ)
- 1980年中葉に大変動
- 1983 Imagined Communities(1991 revised ed. 1987 日本語訳、1991 増補版訳)
- 1986 Writing Culture (1996日本語訳)
- 1990 Cultural identity of diaspora (Hall)
- 1992 The question of cultural identity (Hall)

